スポーツおじいさんになりたい！⑧

『ゴールデン・ボーイ』
（ルーベン・マムーリアン監督・1938）

國友万裕

1．近づいて来る死

12 月、ついに母の兄にあたる叔父が死んだ。そして、1 月入るとすぐに亡父の妹である叔母が死んだ。そんなわけで、この 2、3 ヶ月はダークムードが続いた。叔父さんは 90 歳、叔母さんは 91 歳か 92 歳だったはずだから、十分に生きたわけで、決して早死ではないのだけれど、やはり人が死ぬことを受け入れなくてはならない年齢になってきているという気持ちになってくる。

死は刻々と近づいてくる。俺はこの原稿が出る頃には 62 歳になっている。あと 10 年ぐらいは元気でいれるかもしれない。人間の健康寿命は 75 歳くらいのはずで、だから、人生 100 年時代とは言っても、健康で生きることができるのはせいぜい 70 代の間なのである。もちろん、80 歳過ぎて、バリバリに現役の人もいるが、そういう人はラッキーな一握りだろう。

そろそろ死に支度をしなくてはならないと考えている。でもネットに出ているような終活サイトは眉唾物で、ああいうところに頼んだら、騙されそうな気がして、どこに頼んでいいのかという気持ちになる。

母に何かいい方法がないかと電話すると、「私が今、終活しているところなのよ。あなたはまだ終活というには早い。年をとるにつれて、周りがそうなっていくから、だんだんとわかってくるわよ」という返事。母はもうすぐ 88 歳だが、肝が座っていて、死ぬことも恐れていないし、なんとかなると思っている。

だけど、俺はそういうふうに考えることができないのである。

人生の終章に近づいてきて、俺の人生っ

て何だったのだろうとつくづく思う。

俺の人生は子供の頃から一貫していじめられっ子だった。スポーツ音痴で、普通の子が簡単にできることが何もできなかった。そのことで先生たちからは暴言を吐かれ、女の子たちからも馬鹿にされ、心が壊れたのが 15 歳の時だった。

今だったら不登校はたくさんいるが、あの頃はまだ走りで登校拒否と言われていた。学校に行ってもいたたまれなくて、休み時間に鞄を置いたまま逃げ帰ったこともあった。それから 3 年間はどん底だった。母と俺は、どん底の辛酸を舐めながら、藁にもすがる思いで、あちこちに行ったものだ。しかし、そこで、出会った人は、常識にハマることが人間の真っ当な生き方だと信じているカウンセラー、「人に感謝する気持ちを持たんと行かんなあ」と幼稚園の子にいうような次元の道徳ばかりを真顔で繰り返す精神科医、「私もスポーツ音痴だったけど、逃げませんでしたよ」と諭そうとする学生運動世代の男のカウンセラー、やっと通信制の高校に入り、少しだけでも抜け道をともがいていた俺に、「もう一度高校を受験して高校に行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないと」と諭す宗教団体の偉そうなお婆さん、何もわかっていないくせに自分は分かっていると思い込んで、上から目線で俺をレールの上に戻そうとする人ばかりだったのだ。今思い返せば、あの当時の人（昭和の人）は、誰も彼も社会が間違っているという認識がなかったのである。したがって、誰もが社会のレールに沿って生きるのが人間の真っ当な生き方であり、それができないやつは不良品と思っていたのだった。

本当に昭和はバカの時代。あんな幼稚な考えのまま、中高年まで生きてこられた昭和の人たちは、ある面幸せだ。

その後バブルが弾け、自殺が増え、心を病む人が増えて、やっと社会の方が間違っているという考えの方が大勢になっていった。今の人だったら、一生懸命生きていても、不登校になる子や心を病む子、周りについて行かれない子が存在するという認識は少なくとも持っている。だけど、あの当時はそれがなかったのだった。当時のことを思い出すと今でも怒りは込み上げてくる。しかし、このことは自分の十字架だと思うしかない。

俺はクリスチャンになった。社会の理不尽は人間の罪と思って受け入れて行かなくてはならないのだ。キリストのように十字架を背負って、余生を生きる。それが俺に課せられた運命なのだ。

幸い、だいぶ人生の終わりは見えてきた。あとは老いを生きる年代なのである。

2. 去り行く人々

年が明けて、2026 年となった。

今年の初め、ある大学に出講し、授業が終わった後、いつも通り、行きつけの喫茶店に向かおうとしていた。すると、どうやらお店が閉まっている。なんとなく不穏な予感を感じながら、店に近づいてみるとやはりそうだった。

「2026 年の 12 月 26 日を持ちまして、営業を終了いたしました。昭和 51 年の開業から長くご利用いただきました、お客様方々、ありがとうございました」という貼り紙がされていた。

いつか、こういう日が来ることは想像し

ていた。

そのお店はもう高齢のおじさんとおばさんがご夫婦でなさっているところだったのだが、もう10年くらい前から、「私たちは、もう年金生活者ですから、いつ辞めるかわからないんです。だから、タウン誌から取材の申し込みがあっても断っているんです」と店のおばさんが話されていたのだ。

俺がこの店に通うようになったのは、何よりも大学に近いからだったのだが、最初は俺の存在なんて、どうでもいいのだという気持ちで通っていた。ところが、お店のおばさんは俺の存在を気にかけてくれていたのである。

あれは15年くらい前だろうか。俺はその大学に週に一度だけ出講しているのだが、前期は1、2時間目、後期は1時間目のみという時期があったのである。そのおばさん、そのことにも気づいていらしたみたいで、「先生が来られるんだったら、後期も早い時間に店を開けておきますから、来てください」と11時前に店を開けてくれていたのである。

そう言われると、俺の方も行かないわけにもいかなくなる。半ば、強制的に行くことになった。しかし、ありがた迷惑というわけでもなかった。毎週、通って軽く会話を交わすのも心の安らぎだった。おばさんの方も「先生の顔を見るとまた1週間過ぎたんだなあという気持ちになるんです」と言ってくれていた。

12月26日に辞められたということは、もう去年いっぱいで辞めるという計画でいらしたのだろう。しかし、去年の最後にお店に行った時は、そのことは一言もおっしゃっていなかった。おそらくあまり大袈裟にしたくない。辞めるときは風のようにスーッと辞めていきたいと思われていたに違いないのだ。

3. 過去をどう処理するのか？

どうすることもできない過去のことは断捨離しなくてはならないとは思う。

実は、1、2年前までは滋賀の國友村に一度は行ってみようかと思っていた。俺の先祖が滋賀であることは前から聞いていた。そして、実際にそれを調べた人もいるので、おそらく間違いなく滋賀が俺のルーツなのだ。

とは言っても、國友村に行ったからと言って、何があるのかと思うのだ。俺は自分の過去が嫌いだ。俺は不登校のトラウマをずっと背負って生きてきた。俺にとって過去は郷愁の懐かしい思い出ではなく、悲しみと憎しみと怒りと悔しさに満ち満ちているのである。それを治療するのに残りの人生を俺は使ってしまった。今更、自分のルーツに戻ったりしたら、また過去に引き戻される。

一度は國友村に行ってみたいという気持ちはあるのだが、まだ過去を引きずっている俺は、過去に完全に折り合いをつけることができるようになるまでは過去に戻らない方がいいと思うのである。

俺は九州の実家に里帰りするのにも一大決心がいるのだ。去年の暮れに2日だけ里帰りするのにもあれこれ葛藤があったのである。でも、母も高齢なので、あと何回会えるかわからない。だからどうにか意を決して、新幹線に乗ったのだった。しかし、そうそう長くいることはできない。2泊3日の里帰りだった。俺は九州に帰るとそのまま京都に戻れなくなるのではないかという心

配が湧いてくるのである。

俺はマンションの1階で暮らしている。俺が留守の間にそこに泥棒が入ってきたら、そして、出席簿だとかテストだとか絶対に無くしちゃいけないものを盗まれたりしたら、そういう不安が湧いてくるのだった。そうなったら、京都での生活が成り立たなくなる。そうなったら、故郷に帰らざるを得なくなるのである。

この不安との戦いはもう 25 年以上続いている。俺の強迫症が一番ひどかったのは30代半ばだった。俺はあの頃生活が切羽詰まっていた。今みたいに授業をたくさん持っていなかったので、保険も税金も払えないような日々だった。何よりもちょっとしたミスで、その時持っていたわずかなものでさえ、無くしてしまうのではないかという不安があった。そのため、常に強迫的に神経を張り詰めて生きていた。そして、それが高じて神経症になってしまっていたのだ。せっかく京都で頑張ってきたのに、何も無くなったとき、俺は何をよすがに生きていけばいいのだろう。

元々俺が男性グループに足を踏み入れたのも、生活が苦しく、将来の展望が見えず、何か他の世界で生きることを考えなくてはと思い始めたからだったのだ。あの時、俺は34歳、通っていた心療内科の女の先生から言われたのだ。

「國友さん、これまで一生懸命、一心不乱で勉強してこられたと思うし、今まで勉強してきたことは今は報われなくてもあと 5 年、10年経った時に報われる日は来るはずだから、勉強や仕事のことはしばらく忘れて、他のことを考えてみてはどうですか。そういう時には、仕事ではなく、人間関係に目を向けることです」

そう言われて、俺は男性運動に関わる決心がついたのだった。勉強ばかりの生活はしばらく止めにして、人間関係に目を向けようと。

ところが、いざ足を踏み入れてみると、関西の男性運動は学者集団である。伊藤公雄さんや中村正さんだけじゃない。他にも当時は若手だった研究者の人たちは何人もいた。それ以外の人でも、大学で非常勤をしていたり、どこかの大学で教えていると言っても不思議ではないような学識のある人ばかりだったのである。

大学の世界はしばらく忘れるつもりで男性運動に入ったのが、逆に火に油を注がれるようなことになったのだった。そして、前回の連載にも書いたと思うが、俺は男性運動の歴史の中でも一番の嫌われ者になってしまった。

本当に因果だった。俺はあの団体で最も大きな、おそらくあの団体の最初で最後の大きなプロジェクトに参加した。俺がいなければ成り立たないプロジェクトだった。

しかし、プロジェクトのリーダーの人との性格の不一致はだんだんと顕在化していき、お互いを憎しみ合うようになっていった。そして、俺はあの運動を破門になった。2 年間、自分の居場所を探そうと必死に頑張ったのが、別れは素っ気なく、しかも最悪の形で訪れたのである。

ますます、俺の強迫神経症はひどくなっていった。

当時、こころの健康増進センターだったと思うのだが、心に悩みを抱えた人のための無料の法律相談を受けにいったこともあった。その時に大事なものに対する紛失恐

怖を俺は相談した。「もし、出席簿をなくしたりしたら、どうなるんでしょうか」

すると弁護士の人からはこう言われた。

「普通、出席簿とかテストみたいなものは盗まれないものなんですよ」

そのことを当時かかっていた女性のカウンセラーの先生に話すと、「そうでしょうね。普通盗まれると言ったら、金目のものなのだろうから・・・」と言われたものだった。

確かに出席簿やテストは俺にとっては、無くしてはならない大事なものだけど、泥棒たちにとっては盗んでも何の意味もない紙切れなのである。

あれから 25 年。ついに男性グループのミニコミの復刻本が出た。この後、その運動の中心人物のうちの 1 人の先生からインタビューを受けることになっている。これまでの男性運動の歴史を辿るために関わりのあった人たちにインタビューをしているらしい。

俺が確執を起こした人は 70 代の後半になって、認知症になられたとのことで、もう 5 年くらい音沙汰なし。復刻本やこのインタビューのプロジェクトには関わっていない。

人間って何が起こるかわからないものだなあと感慨深いものがあった。もちろん、俺はインタビューで、その運動を批判するつもりではいるのだけれど、そういう反対派もいた方がインタビュー集は深いものになるから、むしろ歓迎してくれているみたいだ。

そして、何よりも今回やりとりしていてわかったことは当時のあの運動の中核だった人たちは、25 年前、俺がどういう確執を起こしたのかということを全く知らないということなのだった。おそらく皆んな、忙しい盛りだったし、適当にスルーしていたのだろう。俺がどれだけ傷ついたにしても、自分が傷つけられたわけじゃないから、他の人は何も思わないのである。

しかし、巡り巡って 25 年、ここで、俺はついに濡れ衣を晴らすことができるのである。

4. 立命館との復縁！？

考えてみると、この運動との関係は、俺と立命館との関係とも重なり合うのだ。

これまでもこの連載の中で、立命館の人が中心になっているこのマガジンで、立命館を批判するのは心苦しいけれど、俺は立命館に対してわだかまりを持っていることは書いてきた。

俺は不登校で高校に行かず、大検で大学に入った。1 年間、塾みたいなところには通っていたのだが、受験勉強の期間も普通の人に比べれば短かったし、どこの大学に入ったらいいのか、真剣に考えている場合でもなかった。どこかに入らなくては！そして、高校にも行かなかったんだから、大学だけは出なくては！！！そういう気持ちで、大学にはいった。

立命館という大学のことも何も知らなかった。それどころか京都に来たことすらなかったのだ。でも、大学なんて第一希望で入るやつばかりじゃない、だから入ったところで前向きに頑張れば、それでいいのだと俺は思っていた。

しかし、現実はそんな甘いものじゃなかったのだ。3 年間も引きこもっていた俺が、大学に入ったからと言って、すぐに大学に溶け込めるわけはない。そのことは覚悟はしていたけれど、現実はその何倍も、何 10 倍も過酷だった。

あの頃は幸運の女神が俺に完全に背を向

けていた。次から次に悪い方に物事は進んでいった。何よりも女子から受けた集団的な悪口が原因で不登校になった俺が、女の子が８割近いクラスに入れられることになったのである。まさに恐怖と悪夢だった。

しかし、俺はあの時、前向きだった。これもトラウマを癒すチャンスだと前向きに捉えようと思った。なのに、女子からの毛嫌いや白眼視はやはり始まっていったのである。立命館という大学の雰囲気も明らかに俺とは合わなかった。それはそうだろう。俺は大学の下見もしないで、地方試験で入っているのだ。何の予備知識もなく入ったのだ。見合いもしていない人と結婚したようなものだったのである。

しかもあの当時の立命館は人気が落ちた時期だった。当時、貧乏学校・左翼・暗いというイメージを引きずっていた立命館は偏差値が落ち、他の大学の連中からも嫌なことばかり言われた。

だけど、俺は頑張った。今度こそ這い上がらなくては！

しかし、どんどん混乱は広がっていった。そして、最悪の結果が俺を待ち受けていたのだ。卒業間際になって、指導教授からパワハラを受けることになったのである。とは言っても、まだパワハラという言葉もない時代。今だったら、学生の方が先生を訴えることもできるけれど、あの当時は学生が先生を摘発するなんて考えられなかったのである。

あの時、あの先生は魔が刺してラストワード(決定的な言葉)を言ってしまった。その先生は魔が刺しただけのことだったのだろうけれど、4 年間、ずっと嫌がらせをされ、満ち足りなかった俺にとっては、一生消えないような言葉になってしまったのだ。

人生って本当に残酷だと思ったものだ。4 年間あれだけ頑張ったのに、最悪の結果を神様は俺に与えたのである。俺は憎しみの残るような気持ちで、大学を卒業し、他の大学の院に入った。

あれから 40 年近くが過ぎた。大学卒業後、少しずつ薄紙を剥ぐように俺の人生は上向きになっていった。大学で教え始めたのが 29 歳の時、あれから 33 年間、俺は大学の非常勤講師としてたくさんの大学で教えてきた。そして、楽しい思い出もたくさんできた。学生からもたくさん慕ってもらった。

ところが俺は立命館で教えたことは一度もなかったのである。それはトラウマのせいだった。もう大学の頃のことは思い出したくもないし、他の大学にアイデンティティを追い求めた 40 年間だったのだ。もう立命で教えることは永遠にないだろうと思っていた。

ところが、である。今年の 2 月、突然立命館の先生からメッセージが来て、1 コマだけ映画の講義を持ってくれないかというのである。おそらく、ピンチヒッターなのだろう。今学期だけの依頼なのである。

どうしようかと一瞬迷いはした。また何かトラウマ的なことが起きたりしたら、また過去に引き戻される。せっかく、他の大学での仕事は順調で、「京都の大学で教える非常勤講師」という自分のアイデンティティが固まって来たのに・・・。

しかし、考えようによってはこれで立命館に対するわだかまりを溶かすチャンスなのかもしれない。どっちみち半年だけの依頼なので、短い期間だ。半年間教えてわだかまりが溶ければ儲け物。溶けなかったとし

てももう俺の心の中では、自分が立命の学生だったという記憶は遠い過去のものになろうとしている。あの後、色々な大学で教えてきた俺は、他の大学の方が関わりが長くなってしまっているため、流石にもう立命館という大学の名前を背負うことは無くなってしまった。

俺に決定的な屈辱を与えた先生は、俺が卒業してから3年後、まだ50代の若さで亡くなった。また立命館はその後が大学改革で、今となってはかつての貧乏というイメージは無くなり、暗いというイメージもなくなり、学生運動も皆無のはずだ。学生の気質も変わっているだろう。キャンパスも綺麗になっている。

おそらく、半年教えたくらいで立命館と復縁(?)というところまでは行かないだろうけど、半年間教えることで、何かが吹っ切れるような気がするのだ。

今から 30 年近く前、原田美枝子主演の『愛を乞う人』という映画があった。原田美枝子が一世一代の名演技で女優賞を総なめにしたやつである。彼女が演じているのは二役。娘にわけもなく暴力をふるう鬼のような母とそういう母の DV に耐えながらも健気に生きて、今は母親になっているヒロイン。悪女と聖女のような女性を原田美枝子が渾身の演技で演じわけている。

この映画で興味深いのは、今は年頃の娘もいて中年になったヒロインが、母に会いに行く場面なのである。そのことで母と彼女が仲直りするわけではない。母の方は彼女が自分の娘だということに気づいてもいないのである。しかし、ヒロインは自分を虐待した母と再会することで、自分の人生に区切りをつけるのである。母にあった後、彼女が、「お母さん、泣いてもいいかな」と娘の前で涙を流す場面は今でも覚えている。

30年近く前にあの映画を初めて見た時はこの涙の意味はよくわからなかった。しかし、俺も歳をとって、25年ぶりに男性運動の復刻本が出て、40年ぶりに立命館に関わることになって、彼女の涙の意味がわかるのである。自分がそれまで抱え込んできた過去のトラウマに折り合いをつける、その涙なのだ。

俺は男性運動にしろ、大学にしろ、真剣になり過ぎるのである。最初からこの程度のものなのだとクールに距離を置くということができない。本気になり過ぎるために裏切られた時の傷が大きくなるのだった。それは俺の人生の一貫したパターンなのである。

5. 中京に生きる

結局、62年の人生を振り返って、俺が一番、縁があったのは京都、中でも中京区である。

これまでも何度か書いたと思うが、俺が京都に来たのは本当にひょんなことから。俺は東京志向だったから、京都なんて考えもしなかった。しかも、俺は大の漬物嫌いである。漬物を見るのも嫌なくらい嫌いな人が京都で暮らすなんて、前にアメリカ人の先生から、“You live in a wrong place”(間違った場所で暮らしている)と言われたものだった。

歴史に関心があるわけでもなかったし、実際京都に来てみると、京都は摩天楼がないので、俺の憧れていた都会のイメージではなかったのだ。

それがいつの間にか腐れ縁で、43 年の京都生活。

俺は大学院の博士課程は兵庫の大学だったので、その時に引っ越すことも考えたけれど、結局、阪急の大宮から西宮までは意外に近くて通えることがわかったため、京都を離れなかったのだった。

大学の頃は北区だったが、その後、大学院の修士課程になってからは、西院の近くのマンションに引っ越した。その後、留学のチャンスが回って来て、1 年アメリカで暮らし、それから帰国後は大宮駅近くの千本通のワンルームマンションで暮らし、それから 30 歳の時に見栄を張ってちょっと高いマンションに移ったのだが、そこは前のマンションから数件先の 2 K のマンションだった。

その後、18 年ほどそのマンションで過ごした。賃貸マンションで 18 年も暮らす人というのはそうそういるものじゃない。周りはどんどん抜けていったが、俺は引っ越す金がずっとなかったということもあって、そこで暮らし続けた。

今から 14 年前、ついに他のところに移ろうかという気になって、エージェントで紹介してもらえたのが今のマンション。ここは新しくて、綺麗なマンションだが、ここも前のマンションと同じ通りで歩いて 5 分もかからないところ。

すなわち、俺はアメリカから戻ってきた 25 歳の時から 62 歳になる今日まで千本通で暮らしているのである。留学する前の 1 年半も多少離れてはいたものの、中京区のマンションであることに変わりはない。

ということは、23 歳から 62 歳、そのうちアメリカ留学の 1 年間を抜かせば、38 年、俺は中京区で暮らしている。

もう 1 回くらいは引っ越そうかと大学の近い出町柳に新たな住居を探そうとした。しかし、なかなかいい物件が見つからない。出町柳は美味しいお店も多いし、大学街が残っているところで楽しい雰囲気はあるのだが、駅まで歩いて 15 分とか 20 分、そういうところが多いのである。

今住んでいるところだったら、二条駅まで歩いて 5 分、大宮駅も歩いて 15 分で行ける。これから先老いていくんだから、できる限り駅に近いところで暮らさなかったら、どこも行かれなくなってしまう。

65 歳を過ぎると貸してくれなくなるマンションもあると聞いていたので、エージェントに確かめたところ、今のマンションは、それはないとのことである。

もう、ここで死ぬまで暮らそう。死ぬ時は病院だろうけど、病院に入院する間際までは、中京区の千本通で暮らすのが一番いいのだ。

今となっては、ここが俺のアイデンティティ。実家にいるよりも、ここにいる方が遥かに落ち着くのである。

6.『ゴールデン・ボーイ』（ルーベン・マムーリアン監督・1938）

音楽とスポーツの話である。

イタリア系のお父さんが息子にバイオリンをやらせていて、息子も音楽が嫌いではないのだが、むしろ父親思いの彼はお金のためにボクサーの道に転身しようとしている。

ヴィンセント・ミネリ監督の『お茶と同情』（1956）では、息子は音楽や演劇の方が

好きなのに、お父さんはアメフトの方が男らしいと思って、息子が音楽をすることを快く思っていない。それとは逆の話である。

「音楽とスポーツは両立しない」というセリフが出てくるのだが、まさにそうなのかも知れない。音楽は女性のイメージ、スポーツは男性のイメージというステレオタイプはいまだに根強い。

俺は小学生の頃、体育は男子の中でビリだったが、音楽は男子の中では一番だった。得意だった。器楽クラブで演奏したこともあった。あの当時の器楽クラブは男は 3 人で、あとは女の子ばかり。でも、これは昔の話で、今は男の子も多いだろうと思い、学生たちに聞いてみたら、「今でも、そんなもんですよ」と言われた。軽音だったら男の子もいるけど、吹奏楽とかそういうのになってくると女子というイメージがまだ強いのだということがわかって愕然としたものだ。これは明らかにジェンダーへの囚われだ。

偉大な音楽家とされるのはショパン、モーツアルト、ベートーベン、バッハ、男ばかりなのである。実際、男の子でも音楽が好きだという子はいくらでもいるだろう。なのに、一般的には芸術は女性的な分野だという社会通念があるため、女ばかりの吹奏楽部に男の子が足を踏み入れるのは抵抗があるのだ。ちなみに、ダンス部に至っては、男はゼロなのだそうである。

俺は、大学の授業で『プラダを着た悪魔』（2006）を使ったことがある。この映画ではヒロインの先輩の同僚役でナイジェルという男が出てくるのだが、彼は特別女っぽい仕草をするわけでもなく、映画の中で彼が男性と付き合っている場面はないし、ゲイなんていう言葉は一言も出てこないのだが、学生たちの中には彼はゲイであると思ってみている子が相当な数いるのである。それは彼がファッション界に務める都会生活の男性といういかにもゲイのステレオタイプのキャラで、時々、皮肉で冷笑的な態度をとるところなども、ゲイのステレオタイプによく出るパターンだからなのだろう。

先日『青色革命』（1953）という市川崑監督の古い映画を見た。この映画では、三國連太郎が仕草から話し方から女っぽく、今だったら、間違いなくゲイと見なされるであろうキャラクターの役で出ている。しかも、不思議なことに今となったらゲイと思われるキャラであるにも関わらず、彼は女好きで、女の子を一生懸命口説こうとするし、周りの人もそのことをわかっているのである。

この当時まではまだゲイという概念が浸透していなかったため、女っぽく見える男であってもヘテロだという前提があったのだろう。しかし、今となっては大して女っぽくなくてもゲイだと思われるのである。それだけ LGBT が身近になって来たからなのだろうか。

ジェンダーは流動的だ。人によって、「男らしさ」「女らしさ」の定義は違ってくるため、息子にバイオリンをやらせようとする親父もいれば、アメフトをやらせようとする親父もいる。

しかし、この吹奏楽部やダンス部の男女差の偏りを考えれば、やはり男は音楽よりもスポーツという固定観念が強いことは疑いようがない。

スポーツ音痴で、少年時代に散々辛酸を舐めた俺は、やはり、男になりたい！　スポーツおじいさんになりたい！！そういう気持ちが抜けないのである。